昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十五年十月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二五七号）

慈光

第二十二巻　第十号

目次

信仰の修養は実際問題に如くはなし……近角常観……(1)
声聞と縁覚……福島政雄……(4)
生は如何に生くべきか(二)——正定聚について——……白井成允……(7)
死刑囚の信の遷程……佐々木義軌……(14)
夢告和讃……花田正夫……(19)

信念の修養は実際問題に如くは無し

近角常観

信仰は活物なれば、時々刻々進歩すべきものでありながら、とかく沈滞におちいりやすき弊がある。

全体、信仰といえば内心の中にたしかに摑んだ心持がなければならぬ。ところでその摑んだ心持がすると、たちまち、これで充分であると腰をすえるのである。それ故、すぐに沈滞におちいりやすい。

摑んだ様な心持がしたのは、つまり漸く信仰の閾（しきい）をまたいで、門内の微光を認めたばかりで、それから大いに信念の修養をつとむべきである。

私の経験によるに、一つ不審な点があって疑団氷解せざるとき、時機来りて煥然（かんぜん）として明らかになることがある。すると直ちに、我は真随を得た、極致に達したと心得る。これがそも〳〵懈怠のもとである。これは信念の修養に最もいましむべき点である。

全体信仰はあだかも池を掘る如く、幾重とも知れぬ底がある。一つの底に達したからとて、それで充分と思うてはならぬ。その底を破って行くときは、また大いに進むべき余地がある。しばらくすると、又第二の底がある、すると再び又充分であると考えて歩みを止める。また歩みを止めるのも無理ではない、底に達する毎に、相応に水が出てくるのである、いわゆる徹底した心持がするのである。門より進み戸口まで行くときは、たしかに一層明るくなるのである。即ちますます仏陀の光明が明らかにおがまれるようになってくるのである。その時おどりあがる喜びがある、そこでとかく尻を落ち付ける。けれど本人は決して尻を落ち付けていることは自覚出来ぬ、本人は進歩している気持で、むしろ得意である。

さて、この得意なところが大いにいましむべきである。いよ〳〵時機来りて、戸口より玄関まで上がってからかえりみれば、決して進歩していたのではない。唯門と戸口の間の明りに満足して、同じ道を往ったり来たりして楽しんでいたのである。たた反覆していたのを進んでいると思っ

ておつたのである。第二の底に達したときは、以前の第一の底にくらべればすこぶる深いと思って、その水に満足しておったのである。

かく信仰には破って進まねばならぬ無限の底がある。信仰の奥に達して直接に仏陀の大光明に接触するまでには、堂もあれば室もあり、無限の居間を過ぎ越さねばならぬ。現に禅の経験にも「大悟十八通、小悟その数を知らず」とあるではないか。真宗は「三願転入」であるから三返である、と思ったら大間違いである、実は無限の転入である。信念の修養というは、漸々この底を破って進んで往くことである。ところが如何にしてこの底を破るかを考えねばならぬ。もし大いに進むべき余地があることを自覚すれば尻を落ちつけるはずはなけれども、自分がその境界におれば自覚出来ぬのである。

しからば如何にして大いに進むべき余地あることを知るべきか、即ち信念の修養は如何にしてなすべきであるか、という問題である。実地私の経験を云えば、静坐して念を凝（こ）らして仏陀の膝下にひざまづき、大光明に接触する心持をなし、又終日行動、言い為せし跡をかえりみ、又心中に描き出だした妄念を思い浮べて、心の底から慚愧の感に打たるるも、たしかに修養の方法である。これはなるべく常行として実践したいと思うている。

されど心中において接する仏陀の光明が、とかくその時の信仰の程度に応ずるだけしか拝まれない。慚愧の心をふるいおこした瞬間は、如何にも心が洗われた心持はすれども、それが止めば元の俗界に立ち帰った気持になる。これはたしかに底から底まで進む方法ではあるが、底を破るには力が弱い。

次に信仰の内的経験談もたしかに修養の方法である。これは最も愉快な方法である。あたかも諸国の人々が同じく都（みやこ）に上りて、一夕灯下に相会して各道中話をするようなもので、一人一人経験が異るゆえ最も興味が多い。特に各々真摯（しんし）の情をもって敬虔（けいけん）の念をはこんでくれば、一座が融合する心持がする。又、自分よりも一歩進んだ人の経験を聞くときは、たしかに大いに進むべき余地があることを発見することもある。されど実地を言えば、自分よりも進んでいるということを察することはすこぶるむっかしい。故に、多くは今まで過ぎて来た道を反覆することが主になって、底を破って進むには弱い。前途に輝ける希望の光明を目掛けて勇進するというよりも、むしろ後をかえりみて過ぎ来りし山川を眺めている様な心持がする。然らば如何にして信念を練り上ぐべきか、如何なる方法にて底を破って進むべきかを講じなければならぬ。

全体、往くべきところまで往かずに満足しているのであるゆえ、一歩でも進んでいる人より眺めてみれば、先方では歴々わが不充分なことがわかるに違いない。故に、この如き進んだ人より打撃を蒙るがよい。全体、我が満足しているのが病根である、故に、非常に鞭韃を要するのである。この如き場合に遭遇するときは、如何にもわが高慢のいただきにあがっていたことが自覚出来て、満身懺悔の念に堪えがたく、心中深くあやまり果てて、仏陀がわが信仰を増進せんがために、特にかく我をいましめ給うのであるとさとり、感謝の念と共に、はげしく猛進するようになる。

生きた人に接しても、また書物を見てもこの如きことはある。されど人はしぶといものである。一旦はそのような心になって、起っても居ても身の置きどころがない程に思うても、たちまち平気になり易い。

私の経験によるに、もっとも信念の修養上適切なのは、実際問題に接触した場合である、そも〳〵自分が未熟の信仰の程度に応ずるだけの光明で満足しているのはつまり自分の心中に隈なく光明が透徹しておらぬことを自覚せぬからである。ところが、実際問題に臨んで手を下すときに当っては、その光明が透徹しておらぬことが事実上に現われんとする。即ち信仰が未熟なる以上はいまだ光明の到らぬ暗き点がある。人にも云い難い汚い心がある。かの静坐して念をこらして慚愧するときは、ただ汚き心を心中で否定するのであるから、心安く否定することが出来る代りには、たちまちまた頭をもたげてくる。ところが、実際問題に接して実行上にあらわるるときは、右にするか左にするかで黒白清濁の分れ目となる。この時は、汚い心が種々の口実を作り、種々の誘惑を具えて我々を逢迎する。この時一歩も許してはならぬ。かくするが通常世間の当然であるなどと考え、汚い方に傾いてはならぬ。断平として汚き心を打破して正しい道に直行猛進する。ここにおいてたしかに底を破って深く入りこみ薄暗い室より明るい室に入ることが出来る。

かく実際問題につき当って進んだ道は決して後もどりせぬ。一旦実行にあらわした以上は、釘を以て打ち付けたようなものである。再びこの如き場合に遇うも、何の苦痛もなく平気で処理することが出来る。かく実際問題に接触して一点でも仏陀の光明のいたらぬ点がないかをしらべるのが、最も適切なる信念の修養である。若し一点にても暗き点あらば自力が残っているのである。真実仏陀の大光明に直接に交わらないのである。徹頭徹尾、端身仏陀の命令の下に意志が働かないのである。

信仰余瀝、十五節より。

聲聞と縁覚

福島政雄

声聞というのは釈尊の御法の声を聞いて、その御教のまに従って行こうとする人々のことであると承っている。縁覚というのは必ずしも御教のとおりに行なわないでも、縁によって釈尊と同じ覚りを開いて行けば宜いという態度の人々であるという。此の声聞と縁覚というのが仏典にしばしば出て来るのであるが、大乗の仏典では菩薩と声聞、縁覚とを対立させてあることが多く、菩薩は大乗の機であるが、声聞、縁覚は小乗の機であるとして之を低く見てあることが多いようである。維摩経では舎利仏を声聞の代表者のようにして、天女が降らした花が舎利仏の身について離れぬということで、天女が舎利仏をからかう場面などがある。兎に角声聞、縁覚は菩薩に比べて見れば劣等の機であるとせられている。

併しながら声聞は苦・集・滅・道という四聖諦をさとり縁覚は無明・行・識・名色・六処・触・受・愛・取・有・生・老死という十二因縁をさとるとなっている。此の悟りは容易に得られるものではない。私から見れば仏弟子の声聞、縁覚の人々というのはえらい人々である。なかなか私などがその足もとにも及ぶものではないと思う。しかしこれを私の問題として考えれば、私には声聞根性はないか、縁覚根性はないかという問題となる。声聞根性というのは何でも聞いたとおりのことを法律のように心得て、四角四面そのとおりに行なわねば承知が出来ないという根性である。私はこんな根性を多分に持ちあわせている。聞いたとおりを行なおうとするが融通がきかない。融通がきかないから忽ち行きつまる。また他人をも杓子定規で律しようとするので甚だ窮屈である。窮屈な人間であるから自然に人々からは敬遠せられるようになる。それから縁覚根性というのは、自分の小さなさとりや経験などを鼻にかけてひとり善がりでいるという根性であるが、私には此の根性もある。此の根性は傲慢性のもとである。仏教で七慢と言って慢、過慢、慢過慢、我慢、増上慢、卑下慢、邪慢という七

通りに別けてあるが、私などはどの傲慢性をも多分に持つていると感ずる。縁覚根性のゆえに七慢をみんな身にそなえているのである。

此の声聞根性と縁覚根性とが時に応じて私にあらわれて来る。それで人々から敬遠せられて、しかも自分はひとりよがりで色々のことを考えている。

始末におえない人間である。それではひとり深い森の中にでも閉じこもって静かな瞑想にでも耽っているかというのに、それは出来ない。存外淋しがりやである。人間を慕っている。人間を追いかけたいような気分を持っている。それは私の煩悩の為すわざである。実は煩悩が熾盛である故に声聞根性が起って来るのである。此の煩悩をきちんと整理したいので律法主義が顔を出して来ようとする。それが私の声聞根性である。苦集滅道の四聖諦のさとりなどとは遙かにかけ離れている。苦集を感ずるので律法を用いようとするが苦集はなお烈しくなる。律法的に自分は立派なものだと見せかけようとする。その時の内心は淋しいものである。

そこでひとりで悟ったような態度をとりたくなる。独覚根性が起って来る。これが縁覚根性というものである。「世の中の人々は此の自分を知ってくれない。自分は知られる価値のある人間だ。」こんな思いが起って来る。決して自己一人の悟りの境地に落ちついているのではない。さとりの開けた人間であると、人々から持ちあげてもらいたいのである。ここに至って縁覚根性も淋しいものとなる。十二因縁観に徹するなどは夢にも出来ることではない。十二因縁の波に浮きつ沈みつしているばかりである。

こんなことで仏法を聴聞している甲斐があると言えるか。仏典に親しむこと五十余年、信仰上の善知識のお育てもながい間受けているが、私は頭脳ばかりが増長している。他人のことを頭で批判することだけが出来る。苦しんでいる人、悩んでいる人を本当に慰めてあげる力は無い。あれも読んでいる、これも聞いているという心ばかりが動いている。私は親鸞聖人の信仰の道へ私を誘う縁になってくれた叔母が死ぬる少し前に、御信心がわからない由を述べて私に導きの一言を求めた時に、叔母の強く烈しい勢に押されて、何も言うことが出来なかった。それは三十年も昔のことであって、今の私であったならば、歎異抄第九章のお言葉をも考えてお念仏申すであろうと思うのであるが、併し今の私も「まことの心」というものが微塵もなくて、死んで行く人を本当に慰めるということはなかなか出来ないとおもう。

本当の声聞にもなられず、縁覚にもなられず結局は信心らしいことを言って人々をごまかしている自分だと思えば

悲しいことである。仏法はありそうにもないところにあるぞと仰せられていて蓮如上人のお言葉が本当だとおもう。私には仏法がありそうに見えて実は無いのである。

併し此の私にしみじみと徹して下さる仏のまことだけは否定することが出来ない。

虚仮不実の此の身にて
清浄の信もさらになし

という祖聖の御和讃がひびいて来る。

弥陀廻向の御名なれば
功徳は十方にみちたまふ

というお言葉がひびく。そして私の苦悩の様々が仏陀の御声を聞く縁となり、その御縁によって覚り無き心に仏陀のお覚りが廻向せられて来る。そこにはほのかながら底力強くひびくお念仏称名がある。私はいつしかここに生かされて行く。声聞がここにあり縁覚がここにあることを感ずるのである。

昭和四十五年九月五日稿了。

徒然草（九十七段）

その物につきて、その物を費しそこなうもの、かならずあり。身に虱（しらみ）あり、家に鼠あり、国に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり。

仝　上（百三十一段）

まずしき者は財（たから）をもて礼とし、老いたる者はちからをもて礼とす。おのが分をしりて、及ばざる時は、速にやむを智といふべし。ゆるさざらんは人のあやまりなり。分をしらずして、しいてはげむはおのれが誤なり。

まずしくして分をしらざればぬすみ、力おとろえて分をしらざれば病をうく。

仝　上（百三十四段）

かしこげなる人も、人のうへをのみはかりて、おのれをばしらざるなり。我をしらずして外を知るということわりあるべからず。さればおのれをしるを物しれる人というべし。

人は如何に生くべきか

——正定聚について——（二）

白井成允

正定聚の語、原、大経第十一願文から来る。言わく、説我得仏、国中人天、不住定聚、必至滅度者、不取正覚。行巻にこの願文を釈せる論註の文を引く、曰く、縁仏願力故、住正定聚、住正定聚故、必至滅度、無諸廻伏之難。

今思うに必至滅度は即ち入大涅槃である、即ち成仏である、即ち自覚覚他覚行窮満の徳の円現である、是れまさしく法身の理想の成就である。而して釈迦牟尼仏これを現身に証したまうた。これよりこのかた釈迦牟尼の如くに此の理想を現身に成就せんこと、是れあらゆる仏教徒の究竟の念願である。而して此の念願は釈迦牟尼の言える「一切衆生悉有仏性」の語に依りて、必ず果遂せられ得べきことが証せられている。然るに一たび此の念願に醒め、之によりて己が身を省みる時、吾等は其の果遂し難きことを覚えざるを得ず、如何にして之を果遂すべきかを問わざるを得ず、則ち、ここに究竟して生死を出離すべき道への尋ねが始まる。而して此の道がまさしく如来本願力の廻向により

て念仏もうす純粋行に存する事、是れ祖聖の証したまいたる所であるが、之を証するに当って、祖聖は特に住正定聚の語を慶び語りたもうたように思われる。

言わく「真実信心の行人は摂取不捨のゆえに正定聚の位に住す」

（末灯鈔）

二巻鈔には、真実浄信心を内因となし、摂取不捨を外縁となしておられる。その外縁たる摂取不捨の体をなすものは、行巻両重因縁を告ぐる文に依れば、徳号の慈父を因とし光明の悲母を縁とする因縁和合の作用であり、この作用を受けて始めて真実信心の業識が醒め顕われ、茲に即ち信心を内因となし摂取不捨を外縁となしつつ生きる生死が成立つ。ただ念仏して弥陀にたすけられまいらする生死である。本願の念仏に由りて万法は光明を放ち、吾が生死は光明の中なる生死となるのである。

之に因りて、二巻抄の此の文には直に「本願を信受するは前念命終なり、即入正定聚。即得往生は後念即生なり、即時入必定、又名必定菩薩。」の文が続いている。前念命終と云い後念即生と云う。本願を信受する即時に三世流転の生死が終を告げ、即ち転じて報土の真身を得証する者たるに定まるを云う。歎異抄に云う、「弥陀の光明にてらされまいらするゆえに一念発起するとき金剛の信心をたまわりぬればすでに定聚のくらいにおさめしめたまいて命終すればもろもろの煩悩悪障を転じて無生忍をさとらしめたまうなり」即ち此の義である。命終という語に於いて生死を出で離れる道の証されたことが示され、即生という語に於いて此の道に在りて生きる生き方が示されている。而して此の生き方に於いて生きる者が即ち入正定聚の人であり必定の菩薩と称ばれる者である。

正定とか必定とか云われるのは、如来の真実報土に往き生まれることに正しく必ず定まったことを示す、即ち成仏の理想がまちがいなく果遂せられるに定まったのである。定まったというのは、既に報土に往き生まれたとか、既に仏に成ったとかいうのではない。仏に成るのは、報土に生まれた上での事であって、現生に於いて既に必ず生まれ正しく達せられるに定まってしまったのである。摂取不捨の縁が然様に信心の業識を覚醒せしめたから。

（註）涅槃経のこの根本命題は、如来の慈悲が如何なる逆謗闡提の者をももらさずすくう必然性を語るものとして、領解し得る。

（註）信心の業識というものも、如来の願心の衆生への徹到によりて内に顕わされた仏性として、領解し得る。これら二註の義については省みるべきこと多いであろう。

七

それで此の如き位に在る者を正定聚の位に住する者と称するのであるが、此の者の性格を考えるとき、直に善導の機法二種深信の語が想いだされる。其の機の深信の語は、上に掲げた如く、自身が三世流転の罪悪生死の凡夫なるを告ぐるものであるが、此の自覚は己れの良心の内省に因つて直に顕われる罪悪観ではなく、ただ法に照らされることに因つて深く信知されるものなること上に述べた如くであるので、則ち必ず法の深信と相照らして離れざる自覚である。その法の深信は云わく、決定して深く信ず、彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受したまう、疑無く慮（おもんばかり）無く彼の願力に乗じて、定んで往生を得と。則ち三世流転の身が弥陀仏の願力に乗ぜられて必ず報土の覚を開くべき身として即ち必ず仏と成るべき身として生死するのである。而して是れ弥陀仏の本願を信ずる一心の展開である。此の一心は、是れ願作仏心である。即ち是れ度衆生心である、利他真実の

信心であるが、此の利他度衆生の行は、利他真実の信心であるが、此の利他度衆生の行は願土に到りて無上涅槃を証したる暁に於いて即ち円（まど）かに現われるを得るので、一心の因に由りて成仏の果が来たるのである。（天親菩薩和讃）

入正定聚の位に於いて自身は猶罪悪生死の凡夫たるを免れない。たとい摂取の心光に照らされて既に能く無明の闇は破られたりと雖も貪愛瞋憎の雲霧の常に真実信心の天を覆いかくすあり有漏の穢身の存する限り、此の悪から免れきることは出来ない。然しこのしつこい悪の狂いに心身挙げて乱れながら、猶且つ静かに雲霧の下も明らかにして闇無しと云い得しめる光明の滲透があるところ、すべての心身の狂乱が挙げて之を悲しみ愍れみたまう大悲心の中に転入摂取せしめられる。之に由りて罪悪生死の凡夫が能く以て「仏の捨てしめたまう者をば捨て、仏の行ぜしめ給う者をば即ち行じ、仏の去らしめたまう処をば即ち去る」を得しめられ、即ち仏願に随順する「真の仏子」とならしめられる。諸々の煩悩悪障は宿業の華報として依然として猶起らざるを得ざる身でありながら、其の起るところ即ち光明名号の縁力に摂められ転ぜしめられて、却って往生浄土の資たらしめられる、則ち罪悪も業報も感ずること能わざる「無碍の一道」を行く者なるが故に正定聚と称ばれるのである。

八

正定聚に住する者は自ら煩悩を断ち罪業から解脱せんとする聖者の道を歩む者ではない。煩悩を断ち得ず、罪業から解脱し得ざる凡夫なる事を如来の智慧に照らされて知らしめらた、同時に如来の大悲心に摂め取られて如来の徳を証せしめられる者である。聖者の道を歩む者は、成仏の理想を常に将来に置き、其に到達せんとする歩みに於いて、現在の自身を不断に功利化するを免れない。則ち自ら勉め励みて善を修め功徳を積みて仏の覚の位に到ろうと欲するされども、その理想と現実とは永遠に隔絶して、生を終るまで一たるを得ず、当来の生に於いて亦一たるを得べしとの証もあり得ない。いわゆる「自力作善の人はひとえに他力をたのむこころかけたるあいだ弥陀の本願にあらず、しかれども自力のこころをひるがえして他力をたのみたてまつれば真実報土の往生をとぐるなり」此の報土往生の信の確かなるところ入大涅槃の信亦確かにして流転際涯無き我が生死は尽き、現在の日々に煩悩の起り起るを却りて資料として即ち往生の業を転ぜしめたまう不思議の仏願力が身に証せしめられる。ここには自力作善の人に在りて永遠に隔絶してあらざるを得ざる理想たる仏の道が、念々に現実

の我れに臨み来り、我れを率い歩ましめる。則ち我れが仏という理想を将来に描いて之を現実に証せんとしつっおこたれるのでなくして、理想たる仏は既に久遠劫来常に我れと共に在し、我を愍れみ悲しみ育くみましました、その常照護念の故に、「弥陀の方便ときいたり、悲願の信行えしむれば、生死すなわち涅槃なり」の慶喜を得しめられる、則ち久遠の理想が現前の念々に其のみずからを実にする、則ち生死の現実に於いて自然に理想が証せられゆくのである。直実心の念仏の中に貪瞋煩悩の濁波が転ぜしめられ転ぜしめられつっ当処に無碍の白道を現わしゆくのである。正定聚に住する者の歩み即ち仏道である。

其故に信巻に云わく「金剛の真心を護得すれば、横に五趣八難の道を越え、必ず現生に十種の益を得。何者か十たる。一には冥衆護持の益、二には至徳具足の益、三には転悪成善の益、四には諸仏護念の益、五には諸仏称讃の益、六には心光常護の益、七には心多歓喜の益、八には知恩報徳の益、九には常行大悲の益、十には入正定聚の益なり」

横に五趣八難の道を超えるというもの、即ち生死流転の道を超える。是れ現に五趣八難の道の中に流転しつっある身でありながら、既に仏の願力に摂められたるが故に、自の宿業の報として一切悪道の苦難を受くるも即ち転ぜしめられて些（いささか）も往生の障とならしめられざるを云われるのであろう。其の事の究竟円現はもとより報土に往生したる暁にして始めて証せらるべき理想である、即ち当益に他ならぬであろうが、その当益を獲得せんが為に現在生活を夫への手段として功利的に経営する——是れ自力作善の歩みである——のではなく、却りて当益なる理想が常に現在の生死を規定してそれみずからを証しつっある——是れはからわれまいらするのであるところに横超と言わる意義が存するのであろう。この横超といはれる究竟の相が現在生活に現われるところに所謂現生十種の益が数えられるのであろう。

十種の益として示されたものをうかがうに、念仏もうす身は、諸仏から護念せられ、諸仏の心光によりて常に護られてあるが故に、至徳心身に具足し、則ちたとい自己の宿業の報として如何なる悪が起り来ろうともこれを転じて善と成すを得、随って冥衆からも護持せられ、諸仏からも称讃せられ、心に歓喜多きところ、則ち恩を知り徳に報いて常に大悲を行ずるを得しめられる、これ念仏から現に蒙る無数の利益を十の満数におさめて数えたもの、その一々がいずれも入正定聚の益の内容を成すものとしてこれをうかがい得べく、祖聖の現世利益和讃と相照らし、味い尽くる無きものを蔵する。而してこれ念仏において全人の理想なる仏道そのものが現実生活の念々の中に融け入りて無障碍

にあらわれるのを語るものであろう。

更に思うに十益の中にても道徳生活の現実においては転悪成善といい知恩報徳というもの、吾等の身にとりて最も直接に味わゝるべく、常行大悲という如きは甚ぜ遠く隔たれることの如く感ぜられる。彼れが直接に味わゝれるというのは、悪の起ること日夜に繁く、恩を忘れ徳に背くこと不断なるを尊号の憶念によりて知らしめらるること常なるが故であり、此れが甚だ遠く感ぜられるというのは、大悲という如き心境が吾等にとりて極めて遠きが故である。但し、その極めて遠き大悲の真実が不断に貪愛我慢のわが心身を照破したもうが故に、大悲は常に罪業のわが心身に徹りてそれ自らをあらわしたもう。ここに念仏の中に心身をおさめられるところ即ちおのずから大悲を行ずる者とならしめられる所以があるであろう。則ち「念仏もうすのみぞ末通りたる大慈悲心にてそうろうべき」という言葉が味わわれる。

九

この常行大悲の益というもの、恐らく入正定聚の益の内容を成す徳として最も積極的な表現であろう。然るに慈悲は是れ仏道の始終であり、願作仏心すなわち度衆生心なりと云われるのであるが、この心これ如来の願力におさめられて如来に帰依する一心の中に動き出だすところなることを深く思わなければならない。則ち我れ常に大悲を行ずというのではない、却りて常に貪愛に繋がれる煩悩のわれを憐れみ、わが身を通じて如来が大悲を行ぜしめたまうのである。もし我れ常に大悲を行ずと云い得る者は、必至滅度の願の故に既に如来の報土に往生し、ネ槃の徳を証したる者の上の事、即ち還相の聖者の身の上の事であって、未だ生死に繋がれているこの身に於いて云われ得る事ではない則ち常行大悲は入正定聚の位における現益と味わゝるべきであって、直に還相の菩薩の行と同義のものではない。還相の行はあくまでも当益として味わゝるべきものである。この現当二益分別の法門は祖聖において極めて明瞭であって疑をいれる余地は存せず、本より往還二廻向の法門と相応することは云うまでもない。然るに還相の菩薩の行を往相の信行の中におさめ、当益を現益の中におさめて領解をせねばならぬもののような見解が往々眼に触れることがある。

これ恐らく上に述べた三世流転のわが身という生命観を懐かず、如来の廻向による浄土往生という信にうといところから来るのであろう。

十

『一念多念文意』に経の願文等を掲げ釈して言わく

「これらの文のこゝろは、たといわれ仏をえたらむに、

国の中の人天、定聚にも住して、必ず滅度に至らずば、仏に成らじ、と誓いたまえる意なり。又言（のたま）わく、もしわれ仏にならむに、国の中の有情、もし決定して等正覚を成りて、大涅槃を証せずば、仏に成らじ、と誓いたまえり。かくのごとく法蔵菩薩ちかいたまえるを、釈迦如来五濁のわれらがために説きたまえる文の意は、それ衆生ありて、かの国に生れむとする者は、皆悉く正定の聚に往すゆえんはいかんとなれば、かの仏国の中には諸の邪聚および不定聚はなければなり、とのたまえり。この二尊の御のりをみたてまつるに、即ち往生すと言えるは、正定聚の位に定まるを不退転に住すとは言えるなり。この位に定まりぬれば、必ず無上大涅槃に至るべき身となるが故に、等正覚を成るともとき、阿毗抜致（あびばつち）に至るとも、説きたまう。即時入必定ともうすなり。この真実信楽は他力横超の金剛心なり。……」

又、第十八願成就の文を釈する中に言わく

「即得往生というは、すなわちという、時を経ず、日をも隔てぬなり。また、即はつくという、その位に定まりつくということばなり。得はうべきことをえたりという。真実信心をうれば、すなわち無碍光仏の御こころのうちに摂取して捨てたまわざるなり。摂はおさめたまう、取はむかえとるともうすなり。おさめとりたまうとき、即ち時日をも隔てず、正定聚の位につきさだまるを、往生を得とはのたまえるなり」

如来の悲願を聞信する刹那に即ち往生を得て不退転に往する。すなわち正定聚の生は、煩悩具足、罪悪生死の凡夫が、如来の悲願から恵まれた信心に住し行業に生きしめられる生である。もはや凡夫自身が無明を源とする自の因縁において生きるのでなく、如来の悲願の上に万法を在らしめられるところ、自身に由る一切の因縁に慚愧しつゝひとえに悲願の因縁において生きしめられるのである。凡夫でありながら願作仏心を満足し度衆生心において行ずるの徳を内に蔵せしめられたるを憶念して生きる者である。その徳の円成は如来の報土に往生して必ず証せらるべき必然を現にこの生死の身にありて味わいつっ生きる者、即ち日々夜々に煩悩に燃ゆる我が心身において人生の究竟の理想が証せられ行く必然を味わいつっ生きる者である。己れの因縁を修め、現実の生を方途として成仏の理想を追求せんとするのでもなく、既に仏の理想を成りたる者として現実に生きんとするのでもない。それら二途いずれも虚仮不実であり、懈怠憍慢である。正定聚の生にありては、虚仮不実なる我れが如来の真実に照破せられ摂取せられるところ恭敬の心において如来の行を行ぜしめられるのである。現実の生死の念々において理想が証せられ行く必然に生きるので

ある。これを告ぐるの文、祖聖の諸著にあまねくして今挙ぐるに堪えず、その著しき一二を記すに止めた。又、私は所謂真宗学について知るところなき者である、のみならず今この一篇、序次乱れ、思考整わず、忽忙として責を塞ぐに擬するのみ。諸賢の指教を請う。

昭和三十七年六月十一日　稿了

『父と子』

池山敏郎

久しくも子は叛きしかな
家を捨て、世を乱し
ひたすらに進みし焔の道——

人の世の定めなきに
しみじみと心打たれて
亡びざる正義いずこと
大空を仰ぎし日まで
久しくも子は叛きしかな

久しくも父は待ちしかな
子を思い夢に泣き
ひたすらに忍びし涙の道——

歩みたき道をあゆみ
力尽き望み絶えなば
いつにても家に帰れと
世の人の謗りに堪えて
久しくも父は待ちしかな。

父と子のえにし深きかな
讃えつつ歌いつつ
今や共に歩む光の道——

子の歩みたどたどしく
若き日の悩み尽きねど
求むるは父と同じく
とこしえの絶対価値（ならびなきかち）
父と子のえにし深きかな。
（註）父がまだ生きていた頃に作ったものです。（作者）

死刑囚の信の瀝程

佐々木義軌

出生　昭和二年三月二十日。
入所　昭和四十一年六月十八日。
事件　強盗殺人、死体遺棄、私文書偽造、詐欺。
死刑確定　昭和四十三年十二月二十四日。
法名　二月二十日、帰敬式をうけ、釈誓勝。
教誨始　昭和四十四年一月六日。

四十四年二月二十五日、書信。

……今日は日曜で、先生に私の過去を知って貰いたいと思って、書きました、拙い文ですがお許し下さい。

今更親の悪口を云うようで相すまぬことですが、父は九才で祖父に死別し、祖母と共に大変苦労して居りながら子供の教育はすこしも思わず、兄三人、姉三人あり、末子の私は小学校五年の頃から家の手伝いに追い廻わされ、学校も休み勝でした。したがって学校に行ってもさっぱり分らず、勉強も面白くなく成績も下の下でした。

……戦争が劇しくなり兄達は兵隊にとられ、私は野良仕事に追い廻され、学校も六年でやめ、悲しい思いで暮したものです。勿論、新聞もラジオも家にはなかったので、社会に出て自分の無学さを恥ずかしく思いました。

しかし小さい時から働かされたので肉体労働では誰れにも負けず、おかげでどこで働いても人に可愛がられたことが私の取り柄でした。

妻をもち、〇〇市へ来て僅かな資本で家庭工業式に始めた木工が順調にのび、家も建て工場も六十余坪のものを造り、工員も十人余り使うようになりました。

しかし売掛金の手形が不渡りになり、そのために借金をし、それを返すためにまた借金を重ねるという風で資金面が苦しくなる一方でした。そんな時、神仏をすっかり忘れ世間態ばかり考え、〇〇市でも評判のよくない人とはかり恩人の債権者を殺害し、死体をダンボールに入れて、自分の木工場裏に穴を堀り、そこに埋めました。

思えば当時の私は全く自己中心で我欲のかたまりで畜生になっておりました。それから事件発覚まで五年間、済まぬ〳〵と思いながら自首して出る勇気も、また自殺する気

力のないままに心を鬼にして過しました。
また拘置されても、自分の助かることばかり考えており刑の確定するまで迷いと恐怖のみでしたが、今年になって佐々木先生の御教誨をたまわり、今までのことを深く反省させられ、今は衷心から、済まなんだ、悪かったと懺悔の思いばかりです。そして私のような極重悪人でも、念仏して弥陀にたすけられると教えて下さいました。
それに先生から沢山の仏書を差し入れて貰いましたが、頭の悪い、記憶のにぶい私ですから、何回も〳〵繰り返して読んでおります。
また親鸞聖人様のご苦労を知らせて頂き、知らず〳〵お念仏が申されるようになり、何ともいえぬ楽しい、充実した生活をさせて頂いております。今までの生活を振り返って今が一番最高の仕合だと喜んでおります。
先生から差し入れて下さった書は仏教入門、永遠の生命、信心清話、凡人の求道、信に生きた人、でした。仏の大きな力、他力の広大な恩徳を感謝せずには居られません今日はこれで失礼いたします。

九月三十日、書信

……さてもう〇年前のことですが、九月二十九日は私にとっては忘れることの出来ない恩人の命日でございますこんな日に先生から尊い御法話をおききし、宗教に対する深い因縁を知らされましたので、早速先生に、刑の確定当時の心境と、現在の心情をお聞きしていただきたいと思つて書きつけます。
昨年十二月死刑の判決を言い渡された私は、前々から覚悟はしておりましたものの、それは〳〵言葉として云いあらわすことの出来ぬ気持でした。
死の宣告、考えてみれば人間誰もが生れた時から背負わされて居るものの、私はその死を忘れ、おれが〳〵の驕慢が人一倍強かっただけに、この時ばかりは、死の直前に立たされておる自分自身に云いようのない恐怖がおそってきて、身体全体にひびき渡ってきました。深い千仞の谷底へつきおとされるような思いと、しかも孤独感とは一層深く感じました。
こんな苦しい思いの時は念仏は称えても、死の恐怖は私の頭から去りませんでした。この苦しみを仕事で胡魔化そうとしたり、少しでも気持を落つけるように努めましたがどうして〳〵落つけるものではありません。
その頃までの私は念仏は精神を統一させて心の安定をはかるものだと思いこんでおりました。
一月から先生から正しい真実の教を頂きはじめましたが「念仏して弥陀にたすけられる」とお聞きしても、何がな

んだか五里霧中で、さっぱりわかりませんでした。又宗教書を差入れていただき一生懸命に読みました。又お内仏に向って一心に正信偈をあげましたがすこしも落つかず、喜びも湧いて来ませんでした。
こんな時、幼い頃を思い出しました。母が何かにつけて勿体ない〳〵と云いつっ、何時も念仏を歌のように称えて居りました。又時々お寺の御座に参ってきて、今日はありがたいお説教を聞かせてもらってこんなありがたいことはこの世にない、と喜んでいた顔や姿が思い出され、私もなんとかして母のような気持になりたいと必死の思いでした。
幸い佐々木先生の温い教と熱意のおかげで、阿弥陀仏の本願名号のおいわれを聞かせていただいておりますうちに世間でよくいう運命とか天命というものではなくて、今日の私は自業自得で、当然の業報だと知らされました。私のなすこと考えること云うことによって自分を形成しているのだと、業報の厳粛な事実を知らせて頂きました。またこの宿業を縁としてお念仏のいわれをお聞きして、仏力によって新しい道へ出して下さるのだと云うことを知らされました。
私は今まで全く無宗教でおりましたが、私の胸にはじめて訪づれて下さつたものが、阿弥陀仏、お念仏でありました。しかしはじめは苦しい時の神だのみ的な、しがみついて願い祈るものと思っておりました。やがてその間違っていたことを知らされました。この罪業に苦しむ私に
「我れに来れ、我れよく汝を護らん」
と私に呼びかけて下さる阿弥陀仏のみ声と信じさせていただきました。
先生、私は今日まで全く光りのない真暗闇の生活をして来ましたが、この胸に光明を頂き、我身の程を知らせていただきました。朝晩お内仏に向ってお念仏させて頂き、お礼を申し、一日一日を明るくすごさせてもらえるようになりました。阿弥陀経もすら〳〵と読めるようになりました
又、最近になって「称えやすくたもちやすい名号」ということをつく〳〵知らされます。楽しい時は勿論、悲しい時、苦しい時、また孤独で淋しい時、一層念仏が浮び出ます。又、人の中でも他人にきこえないくらいの声で念仏申すことが、かえって有難く嬉しく、考えて見れば不可思議であると体験させて頂きました。
宿業に泣き苦しむ私が、弥陀大悲の光明の中におさめとられ、阿弥陀仏にいだかれて今日も浄土への旅を進ませて頂けますことは、聖人様のお教のおかげで、御恩の中に生かされている喜びで一杯です。
「極重悪人唯称仏　我亦在彼摂取中、

煩悩障眼難不見　大悲無倦常照我」
のお言葉を常にくちずさみ、お念仏申し〳〵お願いして、袋張りの作業を戸内でさせて頂いております。

四十五年一月三日、手記。

……現在のような拘置生活をしておる身には、四季の移り変りと云えば、寒い暑いを身に感じるぐらいのものですそれで正月といっても遠い昔の日々を思い出されるだけですが、然しそれを思い出すことによって慰められます、心の一隅にしまってある私の大切な宝でもあります。正月も今日で終りますが、社会でも恵まれない方々のことを思えば、とても勿体ない正月でした。

先生のお教誨をうけて一年になります。始めの間は何だかむつかしく、理解が出来ないで悩みました。それは私の考が間違っておったからです。

初め私は「如何なる悪人でも念仏を一心に称えれば極楽に生れる」とおもいこんで、一心に願いたのむ念仏を称えました。しかし心は散乱し、色々なことが次から次へと心に去来して、口に念仏しながら、心の中の妄念と煩悩に泣きました。そうしたまゝで御話を聞いているうちに、私の念仏は、一心に数多く称えて、その力でたすかろうとしている、念仏を私のたすかる手段にしておる間違いに気づきました。

念仏は、たすかるよすがの絶えてない者へのお慈悲のかたまりでありました。仏様に微塵も近づくことの出来ぬ私に、仏様が近づいて下さって、私をおさめとって捨てたまわぬみめぐみを知らされました。

私はいつを迷いのはじめと知られぬ、遠い〳〵宿業をもち、今生で五逆の重罪を犯しましたが、この宿業とはなれたまわぬ御仏の大悲心のましますことを有難く喜ぶ身に転じさせて頂きました。歎異抄の「善人なおもて往生をとく、いわんや悪人をや」の仰せを実にありがたく頂き、私如き極悪の者をすくいとげようと命がけになっていて下さるとお聞きし、よろこんで阿弥陀仏にたよる心になれました。

若し私が、無事ですごしていましたら、死を忘れ、享楽に酔い、仏法も知らずにおると思います。たとい勧められて多小聞く気になっても、決して現在のように「念仏衆生摂取不捨、我れ仏とともにあり」という味いは得られなかったと思います。世間には順縁によって信に入る人もあるそうですが、私は逆縁によって、死の絶望と罪悪の恐怖の谷底にあって、阿弥陀仏の大悲のみ声を聞かせていただきました。思えばこれらの一切は仏様の、私一人を救わんとの善巧方便であったと深く信じております。

……昨年は丈夫で一日も休まず袋張りの作業をお願いして続けました。こうした生活する私にはこの袋張りが社会に役立つ報恩行とよろこんでさせて頂いております。

年頭、平素のおそだてを謝し、嬉しさのあまりつたない文字で領解をおききいただきました。本年も一層のお指導をたまわりますようにお願いいたします。

追信。

これで聖人様のお教通りにいただいておるようでしたら仏門に入れて頂くしるしの帰敬式を受けさせていただけるようお願い申上げます

（註）早速本人の希望を拘置所長に願い出、名古屋教務所を通じて本山の許可を得二月二十日に信行院連枝の御参向の許可を得ましたら、其他、N氏とK氏が同様の願出をしましたので、三人受式いたしました。

なお法名は、誓勝、証辰、道稔、とそれ〴〵に授けられました。

讃仰の句

三瓶徳英

九十まで生かされて思う師恩御恩
明日も知らぬ命や蟬しぐれ
不思議とは他力大慈悲弥陀の法
弥陀の智慧たまわる心地世を渡る
我心わがままものと教えられ
愚かなる智慧はたらかせ苦に沈む
長生きは我業報かたまものか
何もかも因果業報念仏して
淋しかろ悲しかろうと御名来ます

四五、七、二七日。

夢告和讃

花田正夫

聖人八十五歳の二月九日夜に

弥陀の本願信ずべし　本願信ずる人はみな
摂取不捨の利益にて　無上覚をばさとるなり

の夢の告げをうけられました。

さて聖人は八十三歳に、浄土文類聚鈔、愚禿鈔、浄土三経往生文類、聖徳太子奉讃和讃百十五首を述作され、また浄土、高僧の二帖和讃を清書し、

南無阿弥陀仏をとけるには衆善海水のごとくなり
かの清浄の善身にえたり　ひとしく衆生に廻向せん

と、廻向句をもつて結ばれ、その御満悦の御影を円朝法眼に描かしめられました。愚考いたしますのに、聖人は、法の真実をあらわすという大業を成し遂げられて、これで御筆をおさめられるお積りであったかと思います。

ところが八十四歳の時、善鸞大徳の問題がおこり、関東の同行達の動揺もあって。御心痛も一入深刻であったことでしょう。

そうした年も明けた初春、突如としてこの夢告の和讃を感得せられ、これを契機として正像末和讃を八十八までに完成して下さいました。

ここに浄・高二帖の和讃と、正像末和讃を読みくらべますと、前者は晴れわたった空に霊峰富士を仰ぐにも似て、法の真実が、尊く美しく荘厳されて讃仰してありますが、この末讃では、末法濁乱の世に、はてしなく流転する煩悩熾盛の我等の上に、弥陀の大悲心が怒濤のように顕現して下さることを切々としてお教え頂くのであります。おもうに仏御在世の時、逆悪の阿闍世王が遂に仏心に帰して、

「世尊大慈悲にして、衆のために苦行を修したまうこと人の鬼魅（きみ）にくるわされて、狂乱して所為多きがごとし云々」

と感泣した通りの悲心の躍動を聖人の上に拝するのは私一人ではありますまい。

併し八十五の御時の三月三日の書簡に「……目も見えず

候、何事もみな忘れて候う上に、人にあきらかに申すべき身にもあらず候……」と、さすがにおからだの衰弱を告げていられます。その余生も枯草にかかる露のいのちと知られるにつけ、過ぎ去り、越え来った歓楽悲喜の夢の如き御生涯を省みられ、本願念仏の一つをおいて何の光ぞ、何のよるべぞ、これなくば末法の凡愚の身に光の影さえも無いといよ〳〵痛切に御感得されたことでありましょう。あゝそれなのに、幸に念仏門に結ばれた法然門下の人々も、聖人に御縁の深い関東の同行の人々にも、その真心をいまだ見出されない人々を聞見されるにつけ、千仞の断崖にあうと河水が暴流となって飛沫をあげて落下するにも似て、切々たる悲心が末讃となってほどばしっているのを拝するのであります。

思うに、前の浄・高二帖の和讃は、仏智の権化にまします文珠菩薩の御心に映ずる広大無辺な法の全貌であり、後の像末和讃は、仏の大慈大悲の権化にまします観音菩薩の御心に映る末法濁世の機相と、そこにさしのべられる善巧の大慈大悲の躍動であります。

夢告とは

夢は五臓の疲れといわれ、痴人夢を語るというようにたわいもないものもありますが、また実夢とか聖夢と呼ぶものがあって、眼ざめている時よりも、純粋で真実なことを夢に教えられた例は昔から沢山あります。「聖人に夢なし」と云った孔子が「夢に周公を見ず」と師恩を忘れ勝ちの身を漸愧されているのは、妄夢と実夢を分けている例で実夢は夢に入らないのでありましょう。

さて、聖人は誰から夢告をおうけになったかということは学僧方が色々想像しているのですが、一番たしかで有力な説は、聖徳太子とされています、私もそうだろうと思います。聖人が太子を救世観音菩薩の示現として慕われ、末讃が慈悲狂乱のあらわれであり、太子和讃の讃仰といい、太子の夢告によってうけられた善信の名で作られている点などからもそのように推知せられます。

本願信ずべし

この和讃は、聖人御自身が聞きとられたので、私共に命令せられたものではありません。ただ不思議なことは、聖人の聞きとられたものが、これを拝読しているとそのまま聖人と共に私への如来のお喚びかけと頂かれることです。これは聖人の信味の特徴、大乗味でありまして、「親鸞一人がためなりけり」をお聞きしていると「私一人がため」と知らぬ間に転じ「私一人のため」がそのまま「聖人一人がため」と転じ、円融無碍であります。聖人一人の中に濁世の一切衆生がおさまり、また一切衆生の中に聖人が満入して下さるおのずからの徳光であります。しかし聖人は飽

までも御自身の事として味っていられるのであります。

さて正像末和讃に、

正法の時機とおもえども　底下の凡愚となれる身は
清浄真実のこころなし　発菩提心いかがせん。
自力聖道の菩提心　こころもことばもおよばれず
常没流転の凡愚は　いかでか発起せしむべき

と、凡愚底下の身には自力では成仏の道の絶えていることを悲しまれ、更に愚禿悲歎述懐和讃には（八十六歳作）

浄土真宗に帰すれども　真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて　清浄の心もさらになし
悪性さらにやめがたし　こころは蛇蝎のごとくなり
修善も雑毒なるゆえに　虚仮の行とぞなづけたる。

と、信後もちっともよくなっていない、罪業の身を慚愧していられます。

「弥陀の本願信ずべし一の夢告は、かかるたすかるよすがの絶えて無い末法五濁の世に、煩悩具足の御身に感得せられた、和国の教主、聖徳太子の切々たる発遣の声であります。天来の徳音と申すほかはありません。

さて、末灯鈔十二条に、本願のこころを

「弥陀の本願と申すは、名号を称えん者をば極楽へ迎えんと誓わせ給いたるを深く信じて称うるがめでたきことにて候うなり云々」

とありますように、本願は成就して名号とあらわれて、「わが名をたもて、念仏申せ、汝が親ぞ」と喚びかけて下さるので、その本願を信ぜよ、との夢告であります。

本願信ずる人はみな

聖人は自分の力、智恵、才覚をもとにした信心を排して月光で月を仰ぐように、仏心の徹到によってたまわる大信心を勧められます、このことは誠に御親切な極りでありまして、自力をもとしたものは自心の動乱や破壊によって動揺し消滅するのであります。

善導大師のこころをうけて聖人は、仏力廻向の信心を

釈迦弥陀は慈悲の父母　種々に善巧方便し
われらが無上の信心を　発起せしめたまいけり

と随喜していられます。

昔から仏法を信ずることの難しさを、盲の亀が浮木にあうと譬えますが、私自身を省みると、盲亀はまだ泳ぐ力がありますのに、私にはその力さえない死骸同様の身であります。この者をかねてしろしめして、ことに憐んで下さる大悲のおまことによってのみ、疑うことの出来ぬ身に育てあげて下さるのであります。

聖徳太子の随喜された勝鬘経に

「如来に調伏せられて如来に帰依し、法の津沢をえて信楽のこころを生ず」

とあります。荒馬が名調教師にかいならされて駿馬となるように、有縁のよき人をとおして如来のおそだてをこうむって、如来に帰依し、また水がいつもうるおうている船着き場や、沢に、葦（よし）や芦（あし）が繁茂するように身辺に常に仏法のうるおいがあって、知らず〳〵にしみこんで信心を発起されるのであります。

しかも一度も信心をおこすものは、摂取不捨のめぐみにまもられて、一人のもれることもなく、浄土に生れさせて下さるのであります、決してむなしくなるということはないのであります。

摂取不捨の利益

観無量寿経に「光明あまねく十方世界を照らして、念仏の衆生を摂取して捨てたまわず」とあり、

阿弥陀経和讃に

十方微塵世界の　念仏の衆生をみそなわし
摂取してすてざれば阿弥陀となづけたてまつる

とあります。

法然上人はこのこころを

月影のいたらぬ里はなれどもながむる人のこころにぞすむ

と詠じられて、念仏を信ずる人の心に、十方を照らしてどうあらうとも捨て給わぬ大慈大悲のまことをいただくことが出来ると述べられ、親鸞聖人は、歎異抄第一章に

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏申さんと思いたつこころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり云々」

と、仰言っています。月光がいかに美しく輝いていても戸を閉じて、家の中で思案する者にはそれを仰ぐことが出来ません。

念仏の人を摂取不捨ときけば、何か仏様がおへだてになっているように思い勝ですが、そうではなく、へだてはこちらの心にあるのであります。信心の目の開くや否や、遠く深い御慈育の光明を仰ぐと共に、その光明は、尽未来際かけて照らし護って下さるみ恵みと感佩するのであります

蓮如上人の御一代聞書に

徳大寺の唯蓮坊「摂取不捨のことわりを知りたき」と、雲居寺の阿弥陀に祈誓ありければ、夢想に、阿弥陀の今の人の袖をとらえたまうに、逃げければども、しかととらえてはなしたまわず。摂取というは、逃ぐる者をとらえておきたまうようなることと、これを思いつきたり……。

とあります。近角先生が一生くりかえして下さった「五分五分根性のやまぬ」私共は、こんなことでは〳〵、と何時も仏をへだて、逃げつめでありますが、このあとずさり

する我執のやまぬ者を、それでも〳〵、と仏は飽迄も向って下さり、どうあろうとも捨て給わぬのであります。このおまことの徹到するところ「摂取不捨の故に正定聚に住す」とも「信心定まるというは摂取不捨の益をこうむりたるなり」とおしえられるところであります。かくて

一人でも行かねばならぬ旅なるを弥陀にひかれて往く
ぞうれしき　　蓮如上人詠

と、現在、ここから御一緒して下さる摂取不捨のめぐみに感泣していられます。

さて、この摂取不捨の照護のない宗教では、いつも戦々恐々として「仰向けに仔犬ねころぶ日南（ひなた）かな」といった大安心はなく、そこには微笑の影も報恩のおもいもありません。聖書につぐ書と讃えられる「天路歴程」の著者バンヤンは度々、神に見はなされた、悪魔の奴隷になっているという絶望と焦慮を繰り返しており、ルーテルも度々同様の苦悶を詐えた由であります。

それにひきかえ、心光に照護せられる者のたのもしさ、そのお姿を、臼杵祖山老師の遺詠に拝するのです。師が直腸癌で不治の宣告をうけられた日に、

覚悟だに要なきまでにみ仏のそだてたまいし御恩とうとし

と誌され、また同信の酒井幽演師は、腎臓病末期の記録に、

病みつかれみ名一声もとなええず弘誓のみむねいよよとうとし

とあり、同師の最後の記に、

「極度の衰弱と高熱、目がまう、世界が廻る。目があかぬ、聞くことがつらい、一声の発声がくるしい。沈黙瞑目、光の刺戟のうすい静寂な暗さを望む。光雲無碍にして虚空の如し、と闇を破る光と共に、また光を覆う雲霧もまた限りなき御慈育なるを味わう」

と、心光照護のたのもしさのもとに、雲霧をも拝んでいられる。これでこそ「本願信ずる人はみな」と、十人は十人ながら百人は百人ながらその業報の如何を問わず往生が保証せられるのであります。

無上覺のさとり

無上覚とは、このうえもないさとりで、真実の智慧がひらけた、弥陀仏と同じさとりであります。歎異鈔十五章にここを

「戒行・慧解ともになしといえども、弥陀の願船に乗じて生死の苦海をわたり、報土の岸につきぬるものならば煩悩の黒雲はやく晴れ、法性の覚月すみやかに顕れて尽十方無碍の光明に一味にして、一切の（衆）生を利益せんときにこそさとりにて候え云々」

と、煩悩具足の凡夫が、仏力一つで往生成仏されることを述べてあります。これこそ他力の大菩提心の成就される有様であります。

このことは、私共にとって大変ありがたいことでありまして、法然上人は、自力聖道の菩提心の成就し難いことを身をもって知られてそれを捨て、かねて如来がいずれの行も及び難い者を悲憐されて、私共のために選びに択ばれたお念仏一つを、往生の道としてお勧め下さったのであります。これが当時の南都や北嶺の旧仏教者ばかりでなく、釈尊の昔にかえれと叫ぶ新仏教者、明恵、解脱の両上人を刺戟して、法然上人の勧めは、外道である、菩提心を捨てて何処に仏法があると非難の声があがり、やがて念仏禁止と流罪死罪の法難となったのであります。

親鸞聖人は、こうした法難を機として、今度は法然上人のいまだ言い尽くされなかったところを完成されて、他力の大菩提心をあきらかにして下さったのであります。ここに仏の本願力によって、地獄を定めとする凡夫が美しき仏となり、自利利他満足し、還相の大活動を期することが出来るのであります。

むすび

聖人はこの夢告の和讃の感得と共に、八十八歳までに正像末和讃を述作して下さいました。それは聖人がかねてから計画されたものではなく、今まで静かに流れていた河水が、千尋の断崖から飛瀑となってほとばしるおもむきがあります。この断崖とは、京都に法然上人のお弟子が多くあっても、また関東二十年の間に出来た関東の同行の中にも、本願の真意が充分に徹していないことを見聞せられ、聖人の信火が焔々と燃えあがられたと愚考いたします。

こんなことを思いますのも、かって池山先生が大病された時、「親鸞におきてはただ念仏して、のおこころを日本中を走り廻っても話したいなあ！」とポッツリとひとりごとのようにつぶやかれました。私はびっくりして「もし先生がお丈夫になられたら、私は鞄をお持ちします」とこたえました。またその頃から先生が、御家族の方々にも、直接に「愛子、念仏しなさい」とか「可愛想に南無阿弥陀仏」とも勧められました。

また近角常音先生の御晩年に「本当に聞いてくれる人があれば九州へでも行くよ」とすでに痼疾をもたれ乍ら語られたことが心に深く刻まれております。

あゝ人生百年順境あり、逆境あり、あらゆる経験をへられた聖人が本願の名号をのけて何の光ぞと外見は悠々清閑に見えながら心底に常行大悲の焔の火と燃えるのを拝するのであります。

あとがき

白萩が小庭に咲きはじめて池山先生の忌月を告げてくれます。本年も御参会下さいますように。

一道会御案内

時、十月二十五日午後一時。
所、京都市右京区山田開町、浄住寺。
市バス、京都駅発苔寺下車。南へ四丁。
新京阪、桂乗り換え、上桂下車。西へ六丁。

今年は私も六十七歳になり、池山先生御往生の年を迎え一入感慨の深いものがあります。

近角常観先生は中風で御静養中に六十七歳を迎えられ、曇鸞大師も「六十有七ときいたり、浄土の往生とげ玉う」を深くおしのびになり、その年の詩に

題二虎石一

眈々（たんたん）として病床に侍り
寂に遇うて忽ち哀嘯（あいしょう）す
遙かに遠く東山を望み
万年祖廟を護らん　　遙山

とあります。遙山と号されましたのも曇鸞大師が遙山寺でお亡くなりになられたことからと、東山を遙かに望まれたことにちなんでいられると愚考いたします。真観様からこの詩を頂いて座右に掲げておりますが、今年はことさら無量の感を覚えます。しかし省みて馬齢をいたずらに加え、病躯老醜をさらし、恩師におわび申す外はありません。余生をただ「国安穏なれ、仏法ひろまれ」と念じつゝ、一日一日を大切にすごさせて頂きたいと願っております。

福島先生の暑中のおたよりに、

私は色々雑務に追われ、原稿も思うように書けませず相すみません。暑さのため風間も横になることが多うございます。読書も致し度、これも思うように出来ません

「人間忽々衆務を営み、年命の日夜に去るを覚えず」若い時から感じていますが、今はいよいよ痛切であります。

また最近のおはがきに、次のお喜びがありました。

殆んど最後の力をこめました著述「日本家庭史と教育」数日中に出版されますことと待って居ります云々。

御案内

○毎月、第一、二、三日曜、午后一時半。一道会例会。市電、新郊通一丁目下車。

○毎月二十四日、午前午后、教西寺法話会。市電、御器所通り、市バス、北山下車。

定価　半年　二百五十円（送共）
一年　五百円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駅上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　吉野穂志郎
発行所　名古屋市南区駅上町二ノ八八　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七

慈光第二十二巻第十号　昭和四十五年十月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可